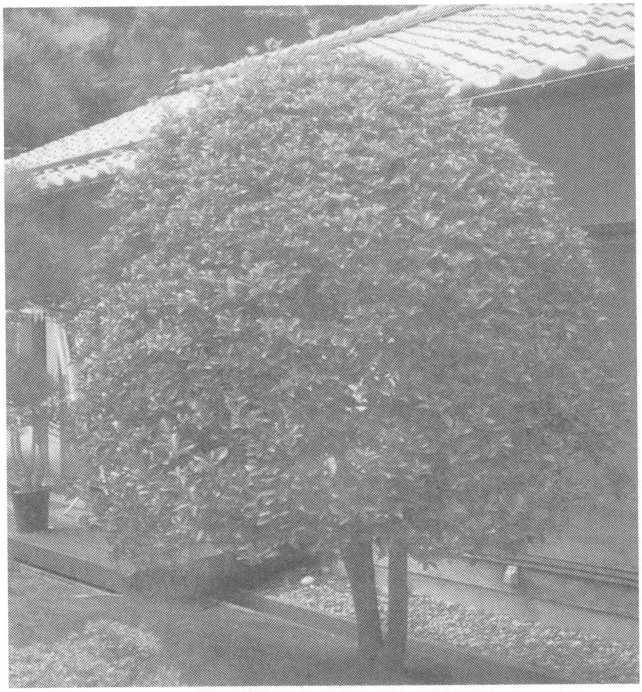


妙の光（たえのひかり）

通刊60号 **復刊39号**
2002年9月10日（季刊）
角田山妙光寺 発行
新潟県西蒲原郡巻町
角田浜 〒953-0011
TEL 0256-77-2025

ギンモクセイ

秋も深まった小春日和の日中、中庭のやわらかな日差しのなかで、ほのかにフッと香ってくるのがこのギンモクセイ。この花が終わると季節は初冬を迎える。

香りがさほど強くないのと花の白いこと、開花の季節がやや遅く晩秋になるのが、キンモクセイとの違い。風に弱く、境内の風の当る所に植えた木はすべて枯れてしまった。この木は中庭で風が当たらないせいか、二十年前の建て替え以前からあるもので、かなりの樹齢になっていると思われる。

中国原産で徳川時代に日本に伝来、幹の模様が動物のサイの皮膚に似ているところが、木犀の名前の由来と、本にあった。サイが住まない日本では着きそうもない名前だが、中国にはいたんだろうか。

銀木犀身じろげばまた香もゆらぐ　篠田悌二郎
木犀の昼はさめたる香炉かな　嵐　雪

山伏修行体験

小川英爾

この七月、山伏の修行体験に行ってきた。場所は春の桜で有名な奈良県の吉野山。山伏は正式には修験道といって、日本古来の山岳宗教と神道、そして外国から入ってきた仏教と道教が混じり合ってできた宗教だ。それだけ歴史も古くて、一三〇〇年くらいになるそうだ。

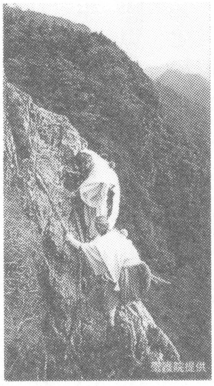
なぜ行ったか。実は日本の仏教は私たちの日蓮宗も含めて、この修験道の影響を強く受けている。総本山身延山の裏手にあって、この秋の団体参拝旅行でも行く予定の七面山も、もとは山伏の修行場だった。妙光寺が七〇〇年前に始まったのも、三人の山伏が日蓮宗に改宗して三つの寺を建てたのが最初と伝わっている。本で読んだ知識はあっても、実際に山伏の修行がどんなものか、体験したいと前々から思っていた。同行者は誘ってくれた写真家の藤田庄市さんほか弁護士、新聞記者、研究者の総勢五人。皆さんそれぞれなんらかで宗教に関わっている人ばかりだ。

京都から近鉄特急で二時間弱、着いた金峰山寺はこの日「蛙飛び行事」ということで、参詣者で混雑していた。これを見て、夕刻集合場所の宿坊に入った。全部で一〇〇人近い参加者が夕食後、大広間に集められ、結団式。何度も参加しているという専門の山伏の中で、初めての体験修行者は二割程か。中には研究のためというアメリカ人もいた。

翌朝は二時起床、すぐ朝食を摂って金峰山寺本堂の権現堂に詣でて出発したのが三時。これから標高差一三〇〇メートル、二八kmの山路を歩くという。しかし聖域といわれるこの山にも舗装された林道が伸びて、

本格的な山路に入ったのは八時を過ぎたころだった。山に入り自然の厳しさを体験し、自然対自分の世界から自分自身を知り、自然の摂理を知るのが山伏だと、折りにふれ説明がある。確かに運動不足の体に山路はきつい。道中散在する古い祠には神秘性が漂っている。ただ、昔の人のように人の手のまったく届かないような奥深い自然の山中なら、恐怖や敬いといった畏敬の気持ちが起こるであろうことは想像できる。しかし百人が列を組んで、今の整備され高圧電線も見える山路を歩いていては、どうも説明の言葉は心に響いて来ない。

午後三時過ぎ、膝がガクガクしだしたころ目的地山上ケ岳の山頂にある大峰山寺が見えてきた。その前に修行場があるという。まずは「鐘掛岩」という岩場を鎖で登る行。落ちたら大怪我という鋭い岩場。登り切ると見事な展望で、霧のかかった山の尾根から吹き上げる風が心地いい。ホッとしたのも束の間、次は「西の覗き」という行場に案内された。二〇〇メートルはあろうかという垂直に切り立った岩の上から、真下を見下ろすようにロープをつけた上半身を迫り出すのだ。ロープがはずれればまっ逆さまに転落。その態勢で先達と呼ぶ山伏に「親孝行するか」とか、「奥さんを大事にするか」などと聞かれ、恐怖で声が出せないと「返事がない」といわれてロープをゆるめられ、さらに体が前にズルリと出る。



ようやく大峰山寺に着いてやれやれと思ったら、宿坊に荷物を置いて、裏の行場に案内された。先程のは前の行場だそうだ。岩が複雑に重なり合っている「胎内くぐり」を抜けると、次はさすがに恐いと思った。霧で下が見えない垂直に切り立った岩の先端を、しがみついて半周するもの。先達が体を支えてくれるとはいえ、落ちたら三〇〇メートルはあるという下に叩き付けられる。しかも雨が降ってきて、岩が滑る。中には恐怖で足が上がらない人も。

無事通過して最後が大峰山寺本堂でのお勤め。

すべてを終えて宿坊の擦り切れ湿気った畳に腰を降ろしたときは、五時を回っていた。質素な夕食に生温いながら缶ビールが一本着いたのは、嬉しかった。夜は参加者全員が集合しての交流会。参加者が感想を言い、主催の金峰山寺関係者が「いまだに女人禁制を解かないのはなぜか」といった質問に答えるという、興味深い場だった。

下山はまったく別の道で、二時間あまり。登山口にはバスが待ち受け、一時間余りかけて出発の金峰山寺に戻る。昼食が宿坊に用意され「精進を落として下界に戻れ」とかで、酒、魚の宴会だった。

修行体験とはいえ、残念ながら特別感動するような場面はなかった。帰り道、私を含めて弁護士、新聞記者等々理屈っぽい人間ばかりの一行は、東京までの車中、議論が止まらない。自然のなかで日常を離れ、体を使った体験は新鮮で心の洗濯にはなる。でも岩を登ったり、谷に突き出されたりする恐怖感で、自身を顧みたり神や仏に対する畏敬の気持ちを持つほど、現代人は単純ではない。じゃあ一体修行とは何か。それは辛いことに耐えるということで、究極の辛さは悲しみではないか。”悲しい“という文字は、非→鳥の羽根が引き裂かれると言う意味からきている。親子夫婦の関係が引き裂かれる、自分の心が引き裂かれる、これが辛さで、これに耐えることが修行だろう。じゃあ日常生活にこそ修行の場はあるんだ。「それを支えるのが、宗教者の役割だよ小川さん」となった。

わずかの体験で修験道を語るつもりはない。今回のコースからさらに熊野に続く道を一週間かけて歩く、大峰奥駈修行なるより厳しい行もあるそうだ。また加賀の白山、山形の出羽三山ほか全国に修験道で知るられる山は多く、行ってみたいと思っている。その前に次回は私が今回のメンバーを七面山に案内することになって、東京駅で解散した。

信心

故郷への想い

横須賀市　阿部　要（七十九才）さん
キミ子（七十六才）さん

阿部家はもともと巻町の五ヵ浜に続く、屋号を重左エ門という家だった。両養子だった要さんの父親が戦前に海軍工廠で働いた関係から、現在の横須賀に家族で暮らしてきた。

要さんは子供時代を五ヵ浜で、弟と母親の三人で過ごしたから故郷への思いも強い。十五歳で志願して陸軍飛行学校へ。ビルマに派遣される一週間前に敗戦を迎えた。戦後は飛行機関連の仕事に就いて、初めての国産旅客機YS11の開発にも携わったという。

キミ子さんは五力浜で生まれ育ち、親の言いつけで遠縁にあたる要さんのもとへ嫁いできた。要さんの母が脊髄空洞症という難病にかかり、その世話をする嫁として、「キミ子を連れて来い」というものだったそうだ。まもなく要さんの父が亡くなった。

姑タワさんは明治女の気概にあふれ、娘時代は海軍大佐の家で女中奉公、その後は毒消し売りで稼いだ気丈な性格。信仰熱心で、身延山に行けばひと月は修行に籠もって帰らない人だった。それだけに病気のため両手が不自由となり日常生活をキミ子さんに頼る毎日でも、「いつでも死ねる。人の世話にはならん」というのが口癖だった。その夕ワさんを、平成二年九十八歳で亡くなるまでキミ子さんは世話をし続けた。

キミ子さんは今も、自宅近くの真言宗の寺に手伝いを頼まれる。タワさんが若い頃、この寺のお堂に住み込みの留守番をして家族を養い、当時幼かった今のご住職を世話した。さらにその娘さんたちを、キミ子さんが世話をした。そんな交際が続いてきたからだ。

タワさんが亡くなったとき、このご住職の申し出で本堂に日蓮宗のご本尊を掲げて、妙光寺住職が葬式を出した。

昨年要さんとキミ子さんは金婚式を迎えた。二人の娘はともに嫁いで、今は仲良く夫婦だけの静かな毎日。跡継ぎがなく、タワさんの一周忌に五ヵ浜のお墓を「安穏廟」に移した。「できれば今からでも五ヵ浜で暮らしたい。そうすれば妙光寺にいつでもお参りできるし」とキミ子さん。「隣の寺のつき合いも長いけど、やっぱり私たち夫婦も亡くなったお婆さんも、妙光寺さんが一番なんです」とは要さんの言葉。

寺の動き

『杜の安穏』完成 他

「杜の安穏」完成

安穏廟の受付満杯により、春から工事を進めてきた『杜の安穏』が完成し、八月一日に開眼法要を営みました。梅雨時の長雨、その後の暑さで工事が大幅に遅れ、芝張り、多宝塔などすべて完了するのは秋の彼岸になります。

安穏廟との中間に丸い阿舎（あずまや）を作りましたが、周囲に池を掘り、ここには沢から引いた水が常時静かな音を立てて流れ込んでいます。お盆お彼岸にここで法要をしますが、普段は開放してますので、どなたでも自由にお休みください。秋の紅葉、春の桜、新緑の季節はさぞかし気持ちがいいことと思います。また来年には、この池に花ショウブと蓮の花を植えます。

周囲に植えた木はアキニレといい、ケヤキの仲間です。根着いて落ち着くと、木陰ができます。阿舎の回りは八重のサトザクラを植え、春に眺めることができますが、寸法間違いでこの秋もっと低い木に入れ替えをします。

『杜の安穏』は今回八〇区画作り、八月末で三七件の申し込みをいただきました。最終的には二四〇区画を作る予定です。金額はこれまでと同額で八五万円。案内パンフレットもできましたので、ご紹介いただける方はお知らせください。

お寺がきれいになるならと、この工事のために安穏会員で東京の小黒トメさんが一千万円を奉納くださいました。

新『妙光寺縁起』完成

お寺の由来を説明する案内書のことを、縁起（えんぎ）といいます。簡単なものから立派なものまでいろいろですが、たいがいのお寺にあるものです。

妙光寺は普段も県内外からの団体や個人の参拝がありますので、以前から用意してありました。しかし昨年の本堂建て替えで外観がすっかり変わり、説明文も書き直しの必要がありました。

そこで写真撮影などの準備を進め、このたび新たにカラーで製作しました。無線操縦のヘリコプターで空から撮影した

妙光寺の新しい“縁起”

全体写真もあります。

これまでのものは二〇〇円で販売してきましたが、今回は版を小さくしたことで一〇〇円です。製作原価はもっとかかっています。

玄関に常時置いてありますので、ご希望のかたはいつでもどうぞ。郵送もしますので、郵便切手一八〇円分を同封してお申し込みください。

本堂を使用する葬儀のご案内

新本堂で葬儀を営みたいというお申し出が以前からあり、会場使用料を決めて春にご案内しました。さらに簡素にやる方法を紹介して欲しいとの声が安穏会員を中心に寄せられましたので、葬儀社に見積りを依頼しました。

基本的には二〇万円で、葬儀社が一式請負できます。それ以外には病院からの遺体搬送約三万、妙光寺会場費三万とお布施が必要です。最小限五〇万円で可能と思われますが、飲食、引出物は実費かかります。

さらに細かいことは現在検討中ですので、直接ご相談ください。事前に支払いまでしたいとの話もあります。逐次検討をを重ねて、お知らせします。

法事等のお斎会場ご案内

法事の法要を本堂で営んだあと、お斎も妙光寺でする方が増えています。

さらに近くの、地ワインで知られるカーブドツチのレストランでのお斎メニューが好評で、年に何組かあります。

そのカーブドツチでは春に新しいレストランがオープンして、人気を博しています。新潟県内の山間地で解体したお寺の古材を使って、ドイツ人が設計したユニークな建物です。この二階を少人数でも貸し切りにして、お斎ができるメニューを検討中とのことです。

お知らせ①

身延山団体参拝旅行　欠員募集

山梨県にあります日蓮宗総本山の身延山久遠寺。こちらに住職が案内する団体参拝旅行です。檀信徒、安穏会員そのお友達等々、どなたでも気軽に参加いただけます。

新潟市内の車庫からバスが出ますので、各地で乗車できます。大型バス一台、一〇人程の余裕がありますので、至急お問い合わせください。

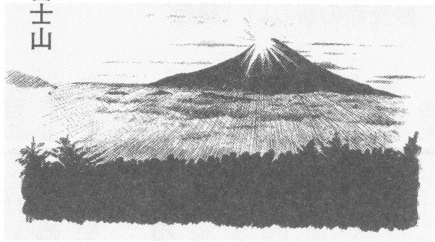
九月二九日(日)～十月二日(水)

①身延山宿坊、七面山、横谷温泉、松本市内観光

六四、〇〇〇円

②七面山に登らない方は、諸寺参拝と十谷温泉泊

六九、〇〇〇円



七面山山頂で拝する富士山からのご来光

中野亘　陶芸作品展と声明の夕べ

前回ご案内した中野亘さんの陶芸作品展を、新本堂回廊で行ないます。大きな照明器具から日常使える器まで、いろいろあって心が豊かになるようなとても楽しい作品の数々です。同時に、たくさんの花を生けたフラワーデザインがさらなる彩りを添えます。

そのうえ、九月十八日には声明（しょうみょう・節をつけて唱えるお経）の新井弘順さん、お連れ合いで新井康子さんの平家琵琶、中野さんの土笛によるコンサートがあります。

新井弘順さんは日本を代表する声明師のひとりで、毎年のようにヨーロッパ公演を行なう方です。住職とは学生時代からの友達で、知り合ったころの新井さんは日本大学で信号機の研究をしていましたが、その後父親の後を継ぐべく僧侶になられました。妙光寺は初めてです。

陶芸の中野さんは音楽家としても活躍していて、海外での演奏活動もあります。秋の一夜、この三人のコンサートはとても贅沢な場になります。

中野亘　陶展　九月十三日（金）～二十三日（月）

秋一天コンサート

十八日午後七時開場・七時半開演

人場無料

・この陶芸展はＮＨＫテレビ等でも紹介されます。

希望者に戒名をお授けします

戒名は仏様の弟子となった証としてつけるものですから、亡くなってからではなく、生きているうちにつけるのが本来の姿です。戒名を戴いて、自分の後の生き方をしっかり戒めるものですから、戒名というわけです。

菩提寺の住職が仏様に代わってお授けするものですから、その寺の檀信徒にしかおつけしません。代々続く方でなくとも、またご夫婦のおひとりだけでも問題ありません。

一部では戒名料といって、お金で買うがごときに思われている風潮がありますが、妙光寺ではこれまでもこれからも無料です。

前々より檀信徒、安穏会員それぞれの方々から、そうゆうことなら戒名が欲しいとの声がありますので、このたぴ希望される方にお授けする、授戒会（じゅかいえ）を計画しました。ぜひともお申し込みください。

今回限りでなく、今後も行ないますので、ご都合つかない方は次回にどうぞ。

記

- 妙光寺第一回授戒会
- 十一月十六日（日）午前九時集合
- 特別の服装は不要ですが、法事に参列するような感じでどうぞ。
- 式の前に、日蓮宗の基本的なことについて研修していただきます。
- 費用として二万円を当日お納めください。略袈裟などの記念品をご用意します。
- 当日はお会式と一緒に行ないますが、右の費用以外はお斎料も含めて不要です。
- 希望される方は、準備の都合上十月三十一日までにお申し込みください。
- 体調が悪く式には出れないが戒名は欲しいという方も、お申し込みください。費用は同じです。
- 不明な点は遠慮なくお尋ねください。

お知らせ②

「親子で栗拾いと里山整備を通して自然に親しむ集い」

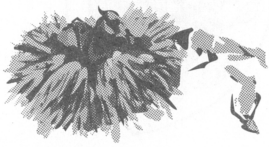
・対象—小中学生とその親か祖父母。子供は複数でもかまいませんが、他人の子供を預かるのはご遠慮ください。檀信徒、安穏会員及びその紹介者。
・定員—大人の人数で二十五人
・期日—十月五日（土）雨天の場合十二日（土）
・時間—午前九時三十分集合　昼食後解散
・費用—無料。保険代、昼食時の飲物は主催者が負担します。
・用意—お寺のすぐ前ですが、山に入りますので靴、軍手、長袖、長ズボン（蜂が活動的な季節ですから、白系の服がいいです）おにぎり、飲物。（昼食時にバーベキューをやります）
・申込—妙光寺まで。定員になりしだい締め切ります。
・主催—NPO法人「渓流再生フォーラム」　共催—妙光寺

しばらく前まで人里近くの森や林は里山といって、下草刈りや松葉集め、炭焼きの雑木集め等に利用されいつも人の手が入ってきれいでした。それが燃料を石炭、石油に頼るようになったことで、この里山が見捨てられたかのようにすっかり荒れ果てています。

妙光寺周辺でも雑木林は下草に覆われ、松食い虫で松林が枯れ、跡にはしの竹がびっしり生えて、昔日の面影はまったくありません。その結果きのこ、松露、わらびは姿を消し、福寿草、雪割り草、カタクリ等々の山野草は限られた場所でしか見られなくなりました。

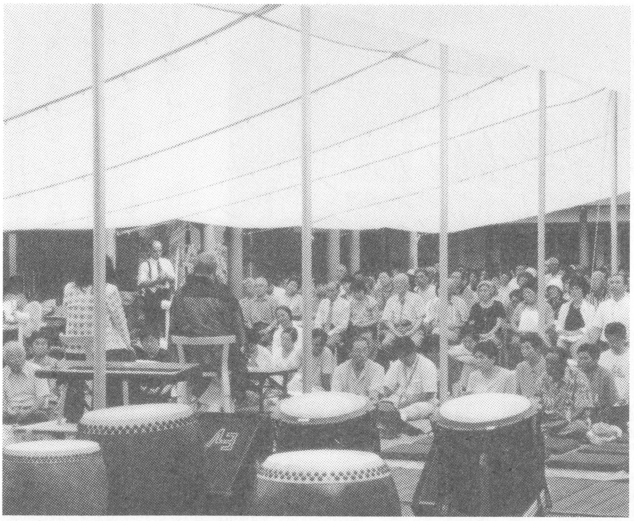
こうした事態に、里山を復活させる活動がいま各地で起こっています。人の手を加えないまったくの自然は原生林だけのことで、森や林は何もしないと荒廃するばかりです。

このたび『渓流再生フォーラム』からの申し出で、妙光寺周辺の里山整備に親子で参加してもらい、同時に妙光寺の栗林に実った栗拾いを通して、自然に親しむ機会を計画したものです。作業は刈ったしの竹を運ぶといった軽いもので、主催者側スタッフが指導します。



あんのんのページ

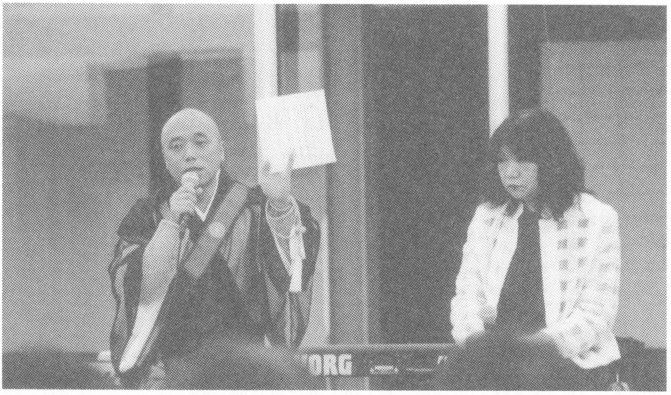
フェスティバル安穏アルバム



テントの下での二人トークも好評

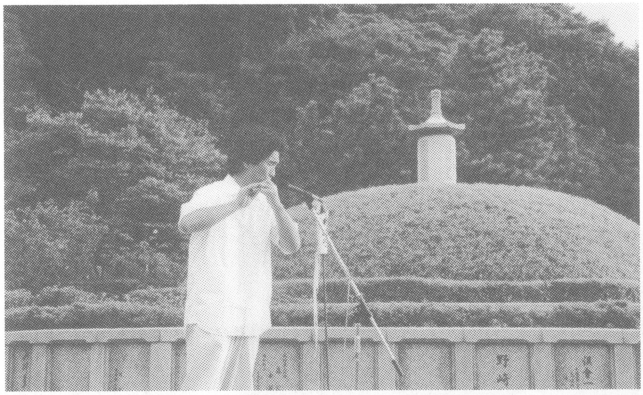
第十三回フェスティバル安穏が、昨年にも増した参加者で賑わいました。今回は初めて芝居をチケット制で計画しましたところ、当初チケット申し込みが少なくて大変心配しました。急きょ県内の会員、檀信徒に再度ご案内し、地元でチラシを配布し、さらに新聞各紙が記事で紹介してくれたせいもあり、最終的に二六〇枚のチケットを販売しました。

当日は暑くても、雨でも困ります。贅沢な希望でしたが、予報は当初七〇％の降水予報。あきらめて前日に大勢のお手伝いの方々で、本堂前の院庭に備え付けのテントを張りました。野外の予定だった芝居の舞台は濡らすわけにいかないので、劇団員が夜遅くまでかかって本堂に作りました。

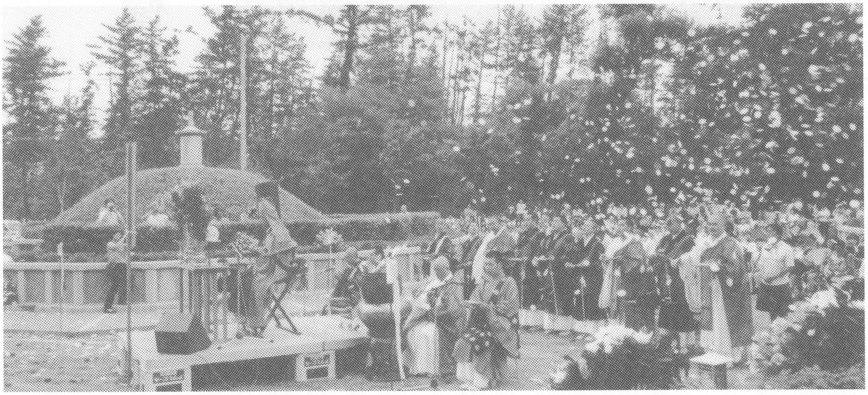


住職と井上治代さんによる二人トーク

ところが当日は晴れて、降水確立一〇%。降らないなら屋外が絶対気持ちいいのです。テントを外そうという声まで。スタッフ一同いつも空を眺めながらの進行準備です。



地元巻町、山添正文さんの横笛。哀調を帯びた音色が、参列者の心にしみる

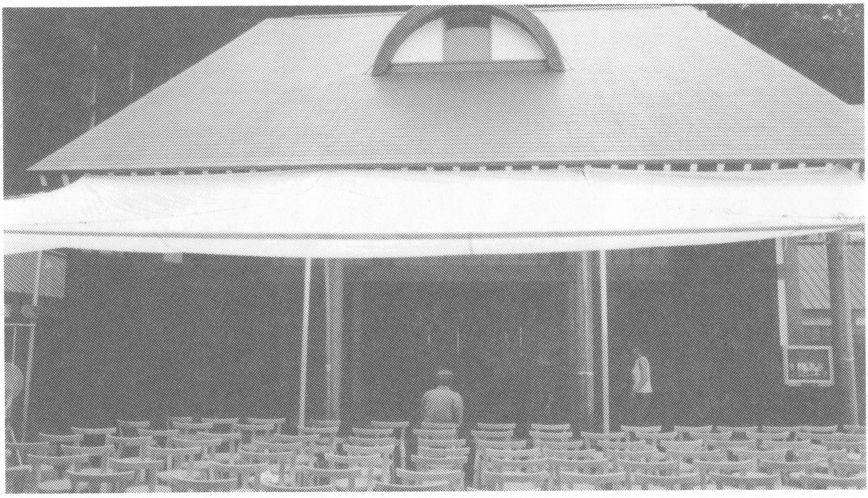


荘厳な総勢15人の出座僧による読経と散華

結局、住職と井上治代さんの二人トークをテントの下で。法要は野外の安穏廟前でできました。曇り空に風が吹いて涼しいうえ、十三人の僧侶が撒く大量で色とりどりの散華のはなびらが見事に舞い散り、横笛の澄んだ音色に、二百本の大ロウソクの火。文字通りこの世の浄土を思わせる、それはそれは荘厳な安穏法会でした。

芝居には関係者も含めて三百人が、本堂とその前のテントにどうにか収まり立錐の余地なし。時折降り出す雨のテントに当たるパラパラという音も気にならないほど、皆さん芝居に引き込まれました。終わって「とっても良かった」と言う高齢の男性、「泣いちゃった」という女子高生。後日もお礼の言葉が寄せられました。

引き続いての交流パーティは当日まで参加希望をいただきましたが、準備の都合で二百人で打ち止め、お断りせざるを得ませんでした。時間がなくて心配した設営と後片づけには、参加者



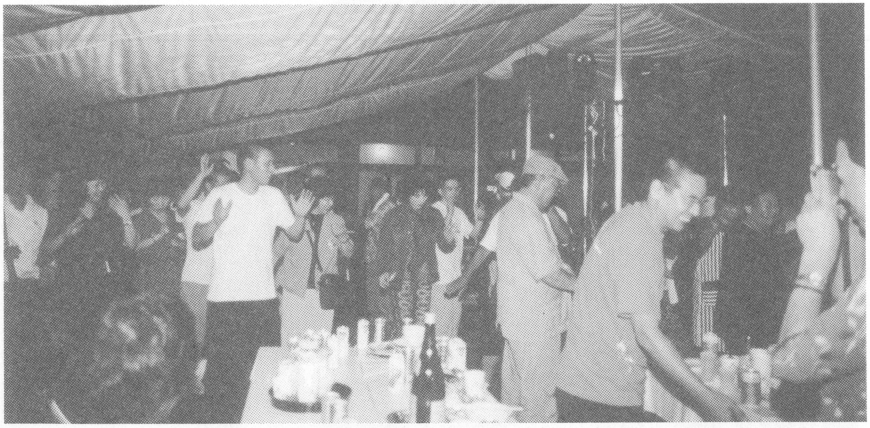
開場前の芝居会場

芝居開演前の挨拶を聞く、会場一杯の人々

が率先して加わってくださりアッという間。この日のためにひと夏練習を重ねた、地元角田浜の檀徒による太鼓。これに助っ人の笛が入って安穏甚句が演奏されるや、早速踊りの輪が出来て盛り上がりは最高潮。雨も吹き飛ばしてしまいました。

スタッフ反省会ではいろいろ意見がありました。中身が濃いだけに、もう少しゆったりした日程を。小川住職の直接の話がよかったから、これからも。法要に会員の祈りの言葉がよかったからこれからも参加型で。パーティーでの踊りにもっ

交流パーティーでの安穏甚句。左から３人目が小川住職



会場一杯の人で、踊りの輪が作れない交流パーティーのひとこま

と時間と、事前に練習を。等々。

特徴的には静岡、神奈川、東京、山形など県外、さらに新潟県内と、会員の方の参加が多かったことがあります。さらに献灯ロウソクがちょうど二百本もあって壮観でした。お礼申し上げます。ほの暗い時間帯での法要ですとより一層あかりが引き立つので、今後検討してまいります。

工事が遅れました『杜の安穏』中央多宝塔の開眼法要を、秋彼岸の中日、午前十時半から行ないます。また別ページでご案内の、陶芸展とコンサート、身延山参拝旅行、授戒会、ご参加ください。葬儀のご相談もどうぞ。

年会費のご送金ありがとうございました。お忘れの方、不明の方、お問合わせください。

寺庭から

やっと涼しくなりました

小川　なぎさ

厳しい残暑も過ぎ、ようやく落ち着いた気持ちで暮らし始めました。

八月はお寺の行事も目白押しで、多い方は三～四回はお寺に足を運ばれたのではないでしょうか。お疲れ様でした。

九月はまた行事とは別にいろいろな催しものが妙光寺を会場にひらかれます。このように活動の趣旨が良いものならば、お寺を会場としてたくさんの人たちが集まる場所を提供することは、先代からやって来たことでした。

何十年か振りにお寺を訪ねて懐かしく思っていかれる方もたくさんいます。この夏、五十年前お寺に泊まったことのある外国人が訪ねてこられ、まだ朝の涼しい境内を散策していかれました。一緒にきた二十代の息子さんが今度は何十年か先にここを訪れるかも知れません。

この長い長い時間のつながりは、形は変わっても七百年も続いてきたわけですから、こんなはっとさせられる経験が出来て本当に幸せです。

どんなことでも、今私たちが生きている事は未来に続いているという自覚を大切にしたいものだとおもいます。

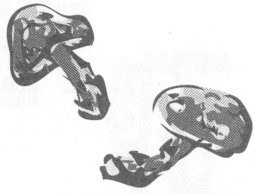
さて夏が終わってみると、静かなお寺が物足りなく感じます。この広い境内と建物を使って、もっとイベントやお祭りだけでなく、小さくてしんみりとした楽しい集まりを考えています。大切な人が眠る場所、私たちの祈りの場所でゆったりとした時間を過ごせるような何かです。

義務でも奉仕でもない。好きなことや得意なこと、やって見たいことなどたくさん考えようと思います。

花を植えること、お寺参り用の袋を作るとか、料理が好きな方は広い台所で料理の研究などなど……。

どうですか？何もまだ決めてないませんが、良いアイデアや参加したいという希望がありましたら、お手紙を下さい。私専用のメールアドレスもありますのでお待ちしています。

（ccf11302@nyc.odn.ne.jp）



行事案内

・九月十三日～二十三日　中野　亘　陶展

・九月二十三日（祭日）秋季彼岸会中日法要

午前十時半　安穏廟合同法要

十一時　彼岸会中日法要

昼十二時　お斎（どなたでも、受付でお申し込みください）

午後一時　住職説教

・十月五日（土）親子で栗拾いと里山整備で自然に親しむ集い

・十一月十七日（日）お会式（おえしき）　・授戒会

弘安五年（一二八二）に入滅された日蓮聖人の、第七一三回忌に当たる法要です。十月十三日がご命日ですが、それぞれのお寺の都合で、日を変えて営んでいます。

日蓮聖人がいまの東京池上の地で亡くなられたとき、時ならずして桜の花が咲いたという故事にちなみ、当日は祖師堂に桜の造花を飾ってご遺徳を偲びます。妙光寺ではこの季節に咲く境内の桜が満開です。

記

午前十一時　お会式法要・併せて授戒会

昼　十二時　お斎

午後一時　法話「やさしいお経の話」鎌倉市　円久寺住職　松脇行真　師

三千円の会費制です。お供物を差し上げる都合上、出席の申し込みを取ります。

各地区世話人か直接妙光寺にお電話ください。

・平成十五年度岩屋七面様のぼり旗奉納受付　一本　二千円

・日蓮宗新聞購読いただいている方は、切り替え月ですので三千六百円。

あとがき

暑い夏でした。しかも残暑が厳しくてどうなってしまったかと思うほど。皆様如何過ごされたことでしょう。本格的に秋を迎え、境内の草むらで鈴虫が大合唱です。西川町の高橋さんが趣味で育てた幼虫を、夏前にたくさん放したのが一所懸命鳴いているようです。

秋も催しが目白押しです。陶芸展も栗拾いと里山整備も、持ちかけられたものでこちらは少し楽ですが。こうしてお寺に足を運ぶ方が増えています。ホッとする自然と建物空間と、そして長い時間の流れがここにはあります。すべて皆様と、先人たちの手で作られたもので大切にしていきたいと思います。　小川